



アラスカ半島の付け根にあるカトマイ国立公園内。ラゴルス山の肩ごしに朝日がのぼり、ナクネク湖の湖畔に現れたグリズリー(ハイイログマ)がシルエットで浮かび上がった。

遙かなる原始の大地、アラスカ

園原徹 (自然写真家)



秋の深まりと同時にムースは、ハーレムを作り始める。1頭の雄が、数頭～十数頭の雌を集める。1年に1度の繁殖期、雄は自分の遺伝子を残すためのチャンスを逃すわけにはいかない。

誰もいない見わたす限りの荒野に立つと、不思議な感覚に陥ることがある。時代さえ忘れ、自分の立つ大地の周りだけが原始の時代へとタイムスリップしてしまうのだ。それがアラスカの風景である。3万頭ともいわれるヒグマは大地を徘徊し、20万頭もの群れを作るカリブーは毎年、数千キロの旅を繰り返す。ムース(世界最大のシカ類)はヤナギの葉を食べて巨体を作り上げ、オオカミの遠吠えが風に運ばれ荒野をわたる。繁殖のために世界各地から多くの渡り鳥たちが集まり、アラスカを取り巻く海にはクジラが回遊する。

厳冬期には -50°C を下回り、1年の多くを雪に閉ざされるこの場所に生きる動物の姿を見ることは、私にとってかけがえないものである。過酷な環境の中でさえ彼らは、毛皮、牙、角、蹄などの身につけた道具だけで幾世紀も生き抜いてきた。それに対して、多くの物に囲まれ、利便さを追求し続ける人間を見ていると考えさせられてしまう。私が惹かれるのは、快適な近代文明よりも、原始の時代から続くこの荒野であり、したたかに生きる動物たちの美しい姿である。